

# 校外学習で深める地域史—地名から歴史を探る—

足柄高校 桐生 海正

## はじめに

本稿は、2021年5月11日に足柄高校で2学年を対象に実施した校外学習の実践を記録するものである。また、校外学習を通して見出した地域史の論点を教材化の一案として提示する。

### 1 実施までの過程

本校では、秋に沖縄への修学旅行を控えているため、例年2年生の春の遠足は、羽田空港に集合し、その後、横浜方面を散策するプランをとっている。しかし、2021年度は、4月12日に東京都に「まん延防止等重点措置」が適用されたため、東京方面への遠足が難しくなった。さらに、県内にも発令される可能性があったため、学校周辺での「校外学習」に急遽シフトすることになった。遠足や文化祭などすべての行事が中止となった生徒を前に、何らかの行事を実施したいと教員の意見は一致していた。事前学習を急拵えで開始し、行き先の地図、事前学習で使用するサイトのまとめなどを用意した。そして、どうにか5月11日に校外学習を実施することができた（各クラスは異なる行き先で、それぞれ河村城址—文命堤、瀬戸屋敷、大雄山最乗寺、浜射場城跡などの史跡を含む4ルートを設定）。

### 2 成果

校外学習を行う中で、確かな手ごたえも感じた。とくに、通常、授業で触れるが、見に行くことのできない近隣の史跡を実際に目で見て学習できたことの意味は大きかった。また、一緒に歩き、その場・その雰囲気の中で内容の説明をすると生徒に説明が「染み込んでいく」感覚を覚えた。生徒は、体感的に歴史を理解できたのではないかと感じた。普段の教室とは全く異なる臨場感のもと学習ができた意義は大きい。学校周辺の史跡見学には、コロナ禍でも密を避けられ、どのような状況でも実施できるメリットがある。さらに、すべてのクラスで事前学習を行ったことで、事前学習の大切さを生徒も実感したようである。修学旅行に際しても、事前学習の重要性を意識した上で、意欲的に取り組ませることができた。一連の流れを新たにつくることができたことは、学校としても大きな収穫であった。

### 3 検討を要する点

一方、検討を要する点や反省・改善点もあった。一つが、雨天時の対応である。当日も小雨の中で実施したが、やはり校外での実施は荒天時に対応できない。ただし、前日までにある程度準備さえしておけば、いつでも振替対応は可能である。

事前学習についても改善の余地はありそうである。参考にする文献の用意、クラス間での統一・徹底、校外学習で何をどのように学ぶか、生徒自身が理解した上で取り組む必要があったと思う。また、周辺地域が箱根ジオパークに認定されたことも含め、とくに理科など他教科との連携にも課題が残った。加えて、当日少なからず参加したくないという生徒がいたことも事実である。レクリエーションやクイズを道中に織り交ぜたクラスもあったが、今後フォトコンテストを実施するなど、生徒が積極的に参加したくなるような仕掛けも必要であると感じた。

### 4 校外学習をさらに深めるために—学校周辺の中世地名を考える—

最後に、校外学習を組み立てる過程で知り得た、授業で活用できそうな事例を紹介し、校外学習をさらに深める視点を述べておきたい。

#### (1) 河村城址周辺の中世地名を探る—「湯坂」考—

河村城址の麓の河村岸には「湯坂」という地名がある。江戸時代の地誌には、「湯坂」とは「案ずるに[梅松論]建武二年の條に、細川四郎入道義阿、湯治の為にとて、相模川村山有云々と見ゆ、当所も

往古は温泉沸出せしと云えば、この所を云へるにや」(『新編相模国風土記稿』雄山閣出版、1996年、198頁)と、「梅松論」を参考に、温泉との関連を想定している。しかし、文字通りに読めば、この地名は、「ユサカ」だが、私の祖父(武井博/享年94歳)の話では、「今はユサカという人が多いけれど、昔はユザクと言っていた。」との証言がある。この証言をもとに、服部英雄の研究を参照すると、領主の直営田に由来する地名として、「ヨウジャク」・「ユウジャク」が各地に残り、これは用作=佃・正作(御正作)を指すという。さらに、「ヨウジャク」は「ヨジャク」、「ヨザコ」と変化する事例があるという。ここからは私見となるが、YOUはYU、SAKUはZAKUとなってもおかしくはないのではないかと考える。つまり、「湯坂」とは、領主の直営田を指す「用作」に由来するのではないか。同地の米穀が、後年宮内庁献上米に選ばれたように、同地は中世から優良水田だったのではないかと考えている。

その他にも、河村城を描いた古地図(般若院所蔵)には、「土佐屋敷」「秀清屋敷」「道本屋敷」「家中庭」「牢屋」などの地名が記載されている。「土佐屋敷」からは中世の居館跡が発見されていることから、今後教材研究を進める上で、可能性を秘めた地域といえる。

## (2) 松田の中世地名を探る—松田惣領と松田庶子—

松田町には、松田惣領・松田庶子という地名がある。この事例は、『図説日本史通覧』(帝国書院、2018年)111頁に「今日とのつながり 神奈川県足柄上郡松田町の「松田惣領」・「松田庶子」などは惣領制に、埼玉県さいたま市浦和区の「領家」、岡山県高梁市の「領家」「地頭」などの地名は下地中分に由来する」と引用されるように、惣領制を考える上で全国的に典型例となり得るものである。問題はその読み方である。庶子交差点の標識には「庶子(Shoshi)」と表記される一方、『新編相模国風土記稿』では「そし」と記し、地元でも「そし」と呼ぶ方が多い。これも服部英雄の研究に学べば、中世の仮名文書では、文書を「もんそ」、所領を「そりやう」と記す例があるという。つまり、中世は「しょ」を「そ」と発音していたのだ。現在でも庄原市(広島県)の別所谷<sup>べつそだに</sup>、江北町(佐賀県)の「惣領分」と「祖子分」という地名が残るといふ。したがって、松田庶子は、中世以来の発音を継承する稀有な例といえ、現地の呼び方は歴史的な経緯を持つ。他にも学校周辺には、中之名<sup>なかのみょう</sup>(開成町)や延清<sup>のびきよ</sup>(小田原市)などの中世地名も存在する。今後周辺の中世地名から授業を構想したいと考えている。

### おわりに

校外学習は、生徒の目を輝かせ、普段の授業では体感させることのできない魅力を持つ取り組みの一つである。今後学校行事で実施できずとも、授業、部活、講習などで応用も可能である。

現在高齢化などにより、地域の地名が忘却されかねない危機にある。地名が現在に残る大切さを認識し、地名の「位置」や「読み方」も含め、それを後世に伝えていく必要がある。一方で、「中世地名が現在に残っていることの大切さ」を伝えるだけで授業を終わらせない工夫も必要である。「なぜ庶子は「ショシ」ではなく「ソシ」なのか」「なぜ湯坂は「ユサカ」ではなく「ユザク」なのか」、資料選択と教材化は至難の業となるが、地名の由来に歴史的に迫る授業実践にも取り組んでいきたい。

### 《参考文献》

- ・服部英雄『地名の歴史学』(角川書店、2000年)、同『景観に探る中世』(新人物往来社、1995年)
- ・『河村城関連遺跡 河村城関連遺跡詳細分布調査報告書』(山北町教育委員会、1996年)

※本稿は、2021年7月7日に日本史研究推進委員会(博学連携例会)で報告した内容を原稿化したものである。当日は、神奈川県立歴史博物館の渡邊博貴学芸員も「地名・聞き書き・景観に探る中世 武士本拠—島根県益田市の現地調査実践から—」と題して発表し、教員・学芸員の間で活発な質疑が交わされた。渡邊学芸員からは、「ユザク」の「ユ」は井の意味で湧水を示し、「ザク」は谷戸地形を意味する言葉とは考えられないかとの貴重なご意見もいただいた。今後検討していきたい。